

視察調査 「兵庫県立神出学園」「農業公園」「いぶき明生支援学校」

日 時：平成 30 年 2 月 7 日（水） 11：00～12：00

場 所：兵庫県立神出学園

調査事項：「公立フリースクールとしての生徒への支援」「ユネスコスクール」について

対応者：兵庫県立神出学園 加嶋校長、埴副校長、蔭山総務課長、犬伏指導課長

視察者：藤原武光・川内清尚・川原田弘子・平木博美・人見誠・永江一之

報告者 平木博美

視察内容

①学園の概要

「青少年が、ゆとりと潤いのある共同生活の中で、自然、人及び社会とのふれあいを通じて自己に対する理解を深め、自らの進路を見出すことができるよう支援することにより、こころ豊かな青少年の育成を図る」ことを目的として平成 6 年 10 月に開校した全国唯一の公立フリースクールである。対象は、中学校を卒業し県内に在住する 23 歳未満の青少年で、在籍は 2 年間だが、その後もアフターフォローがある。不登校等によって進路を選ぶことがうまくできなかつたものの、自分の生き方や進路を見つけ



たいという意欲をもつ人が体験学習や寮での共同生活をしながら、心理カウンセラーや教務スタッフによる面談を通して、個人に応じた支援を受けることで、自己理解を深め、自尊感情を高めることを目指している。できるだけ、「学校」という色を取り払い、「授業」ではなく様々な「体験プログラム」を毎日組んで、不登校や引きこもりから立ち直ろうとする青少年に寄り添い、見守りながら支援している。

1 学年約 30 名の定員で、中学校卒業生、全日制高校生を合わせると入園生の 86%になり、卒業後は進学が約 70%と多いが、それ以外は卒業後しばらく経ってから就労する人が多い。

月曜日の朝に登校し、木曜日夕方に自宅に戻る。当初は親が送迎するのがほとんどであるが、次第に自分で電車とバスを乗り継いで登下校できるようになる場合が多い。

不登校支援で蓄積した知識や環境を活かして、金曜日は県の要請もあり、在園生以外のひきこもりの方々のための体験指導なども始めている。

学園では夏祭り、東北被災地とのふれあい交流、全校生による宿泊体験旅行、学園祭などの行事や、ピッコロシアターや楽



農生活センター等との連携を通して、さらに豊かな体験を積めるよう工夫しており、多くの人と関わることで精神的な成長が図られている。

学園生も保護者も、学園生活については、寮での集団生活をし仲間とふれあえたことによって、コミュニケーション能力も向上し、考え方にも変化があったと概ね評価が高い。

②「ユネスコスクール」の取組

平成26年12月から平成29年3月まで約3年をかけて、ユネスコの理念を教育現場で実践する学校を認可する制度である「ユネスコスクール」の申請をしてきた。フリースクールが登録されるのは国内初である。学園生の体験プログラムの中に「エコ環境」を設定し、ビオトープなど自然環境を利用した環境学習をさらに充実させ、ガーデニングや動物飼育など他のテーマとも連動させ、プログラムを進化させていく方針である。



承認を得たら終わりではなく、毎年の活動の報告書を提出し審査を受けるので、これまでの実績を活かし、進化させながらさらなる活動の充実を図りたいとのことであった。

所感： 自然環境に大変恵まれた立地であることを活かした体験プログラムが組まれていることに納得した。学校に行けなくなってしまった心の葛藤を抱える青少年に寄り添い、見守り、支援するというスタッフの皆さんの徹底した方針に感心した。施設自体も自然の木のぬくもりの感じられるデザインであり、食堂は「心のよりどころ」になれるような温かさをもった場所にされており、誰とも話したくない人は窓を向いて食事ができるような席まで設けてある配慮には感服した。不登校で学校に通えなくなった青少年だけではなく、現代社会では「ひきこもり」になってしまっている30代、40代の人が多いことを考えると、現在金曜日に実施しているような体験講座を拡充していく必要があるのではないかと考えさせられた。



日時：平成 30 年 2 月 7 日（水） 13：30～14：40

場所：神戸ワイナリー（農業公園）

調査事項：施設概要と神戸ワインの現状について

対応者：神戸ワイナリー 中川理事長 その他 4 名、経済観光局 6 名

視察議員：藤原武光、川内きよなお、川原田弘子、平木博美、永江一之

報告者：平木博美

視察内容

①施設概要

農業公園として設立 34 年を経過している。神戸ワインは、自社畑 4ha、契約農家で 40ha の合計 44ha で収穫された「神戸産ぶどう」を全量使っている。この作付面積は甲子園球場 11 個分に相当する。神戸市西区平野地区、北区大沢地区に契約農家がある。

園内には、レストランやワインショップ、会議室などを持つ公園管理館をはじめ、バーベキュー場、陶芸館、ちびっこ広場、古民家を保存して利用している民具農具館などがある。

②業界状況

ワインは売上の 95%を大手 5 社（サッポロ、アサヒ、サントリー、メルシャン、マンズワイン）が占めているが、全国では約 380 のワイナリーがあり、毎年 2 か所くらい増えている。産地をワイン名につけるためには、85%はその土地のぶどうを使う必要があり、今後その規制は厳しくなっていく。神戸ワインは、100%神戸産のぶどうを使っているため、自信を持って売り出せる。大手を含め他のワイナリーは、海外からぶどうジュースを輸入してワインを作っているところも多い。ワイン醸造免許取得のためには、年 8000 本以上作る必要がある。



ポリフェノールが含まれていて体にいいと第一次ワインブームがあったが、現在は第二次ブームと言われるほど売上が第一次ブーム時代と比較して 2 割程度増えている。ここ 3 年は安いチリワインが売上トップで、国内ワインの売上は伸びていない。ビールの消費量がアルコール全体の 4 割から 3 割に減っており、ワインの消費量は増えてきている。

③神戸ワインの状況

5 年前は年間約 40 万本生産していたが、現在の適正量としては年間 28 万本ではないかと考え、生産調整をしている。以前の在庫処分などで単価を安く売りさばいた時代もあるが、現在では、品質にこだわり、単価を高く設定しても買ってもらえるよう販売努力をしている。

酒の流通は、歴史的に、販売者から問屋へ、小売酒店へ、そこからレストランや個人にという

ルートになっており、これを打破することは難しい。プレミアムをつけて限定数量で販売すると好評で、2 か月で 2000 本を完売するという実績も上げている。

④今後の見通しと課題

ようやく「美味しい」と認知されてきたものの、まだ以前の「まずい」印象の残っている市民、消費者がいるので、今の神戸ワインを飲んでみてもらえるような機会を増やさなければならない。また、どんな場所で誰が作ったぶどうがこのワインになっているか、というストーリー性なども大事な PR 要素になると考えるので、しっかりと取り組んでいきたい。

所感：神戸ワイナリーの中でお客さんが来てくれるのを待つだけではなく、生まれ変わった神戸ワインを大いにアピールして売っていく戦略が必要だと感じた。海外ではよくある産地でのワイナリー共同イベントとしての試飲会と併せての地元産品の販売なども効果があるだろう。飲酒運転が厳しく取り締まれる時代になっているので、交通手段の確保も欠かせない要素になる。



また、都心でのアンテナショップが大変好評だったことを考えると、都心やウォーターフロント地区でワインづくりを体感しながら飲食できるようなセッティングができれば、宣伝効果が大きく、神戸ワインの魅力発信につながるのではないかと考える。これからの戦略的なプロモーションに大いに期待したい。

日時：平成 30 年 2 月 7 日（水） 15：00～16：00

場所：いぶき明生支援学校

調査事項：生徒への支援内容について

対応者：山口准校長 その他 2 名、教育委員会 6 名

視察議員：藤原武光、川内きよなお、川原田弘子、平木博美、永江一之

報告者：平木博美

視察内容

①施設概要

平成 29 年 4 月に開校した知的障がい部門、肢体不自由部門を併設した特別支援学校である。

小学部から高等部まで併せて 260 名が在籍し、教員 184 名、その他職員 35 名で運営している。多くの生徒はスクールバス 7 台を利用して、垂水区西部と西区から通学してきているが、通学時間帯には西神南駅からの市バスも通っており、電車とバスで通学している生徒もいる。

普通教室に加えて、感覚学習室・動作学習室などの特別教室や、体育館・多目的運動スペース・プールなども、最新の設備が整えられており、個人の障がいに応じた指導ができるようになっていく。

②施設視察

体育館、多目的運動スペース、プール、動作学習室、感覚学習室、を視察してから、幅広く明るく、緩やかなスロープを通過して 2 階へ移動した。スロープは歩行訓練にも使われる。途中の壁にも窓がカラフルに色づけられて開いており、心が軽やかになるような感じがした。

オランダの技法をとり入れたというスノーズレン室では、視覚・聴覚・触覚とそれに関わる運動感覚や認知感覚を刺激し、重度の障がいを持つ生徒の目の動ききや、わずかな体の反応をとらえて機能回復を図っていくという取り組みがされるとの説明を受けた。

さをり織り室には、作業中の布が機に残っていたが、どの布も配色が明るく若々しく、生徒たちの感情表現を見る思いがした。

2 階に設けられている体育館の観覧スペースは、生徒たちの体育館での活動や発表を保護者が、ゆったりと観覧できるように工夫されていた。

カームダウン室は、教室で自分をコントロールしきれなくなった生徒が狭いスペースで自分に向き合い、落ち着くための部屋であるが、よく利用する生徒もいるとのことで、この狭い空間が精神的な安定をもたらす助けに



なるのだと感心した。

職業教育棟では、接客の作業学習としてのカフェを視察した。パンを焼き、カフェで提供しているとのことで、週3回を目途に運営しており、地元の人たちにも好評で生徒たちも意欲的に取り組んでいる。カフェで働くことだけが目標ではなく、人とのコミュニケーションをとれるよう訓練することが大切だと認識して取り組んでいるということであった。



所感： これまでの古くて狭く、人の多いイメージの養護学校とは全く違い、天井も高く、天然光をたくさん取り入れ、廊下もスロープも幅が広く、ゆったりと確保された快適な設備が整えられている。様々な新しい設備が導入されているが、指導する教員は、その設備の効果的な利用などについては、日々研鑽を重ねていかなければならないのだろうと思い、その努力に敬意を表したい。

それぞれに支援の必要な多くの生徒を受け入れ、指導していくためには、学校に勤める教職員の努力はもちろんのことだが、企業や地元の方々の協力をいただきながら、地域として生徒たちを見守り、育てていくことが重要だと改めて感じさせられた。